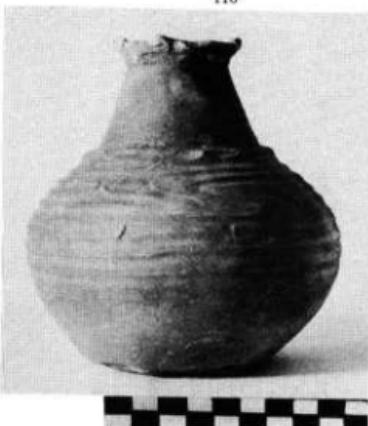


〔壺形土器〕 - 115 (一部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区E5・F5グリットF5区のII層より出土した、大洞C2式粗製壺形土器である。

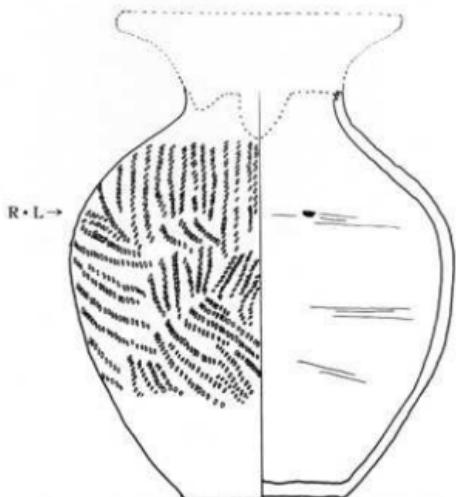
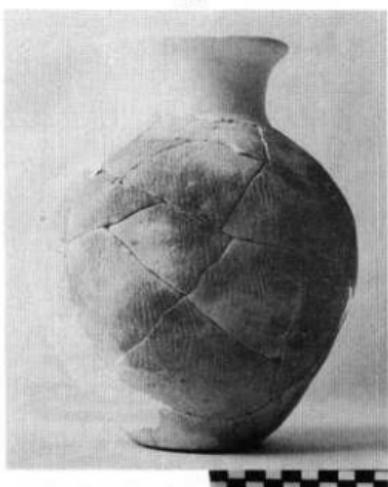
- ・ このものの器形は、口頸部がやや外反するもので、口縁はさらに開き、肩部は張らずゆるやかにカーブする胴部を持ち底面はやや上げ底である。
- ・ 施文は、左傾する二段単節L・R縄文が施文されるものである。
- ・ 色調は、器外面は、灰褐色を呈するが一部灰黒色の部位もある。内面は灰黄色を呈するが胎土・焼成は悪く、ザラザラしているものである。



〔壺形土器〕 - 116

☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットII層出土の大洞C2式精製壺形土器である。なおこのものの底部写真は、A・P・L60～右に入れてある。

- ・ このものの器形は、洋梨状の器形をなすもので、口縁には2と1対の側方に突出する小突起を4対付け、頸部は末広がりに広がるものである。胴部は、ほぼ中央部に最大幅があるので、底部は欠落しているものである。
- ・ 施文を観察すると、大洞C2式のメルクマールである曲線文と大洞A式の入り組み文字文の変形したものが施文され、他は無文である。この大洞C2式～A式の両方の施文要素を有するタイプは、今回の発掘で鉢形・壺形等にもあり、大洞C2式の後葉に位置づけられよう。
- ・ 色調は目下は外面暗褐色であるが朱ぬり痕が認められる。内面は灰黒色を呈する。胎土・焼成は良い。



〔壺形土器〕 - 117 (図上復原)

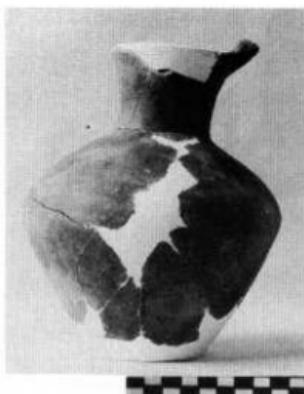
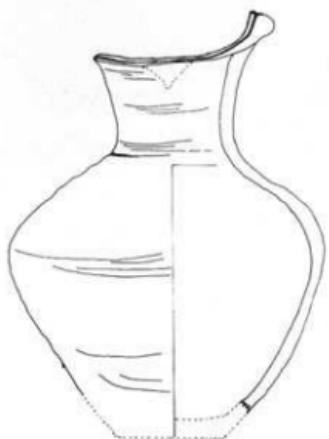
☆ ここに掲げたものは、中央区AN 2 グリット II 層下位より出土した大洞C 2式粗製壺形土器である。

- ・ このものの器形は、A・P・L 52 - (115) に示した壺形土器と同様、肩部が張らない器形で、胴部は、ゆるくふくらみ底部に至るもので、底面は平底である。口頸部は欠失しているが、立上りの形態から図のように外反するものと思われる。
- ・ 施文は、肩部下より底部直上まで、二段単節 R・L 繩文が縦位・斜位に施文されるが口頸部は無文と推定される。なおR・L 繩文を施文するものは、ごく少ない。
- ・ 色調は、器外面灰黒色、一部明黄褐色、内面は、暗褐色を呈する。胎土・焼成は良いが磨滅しているものである。



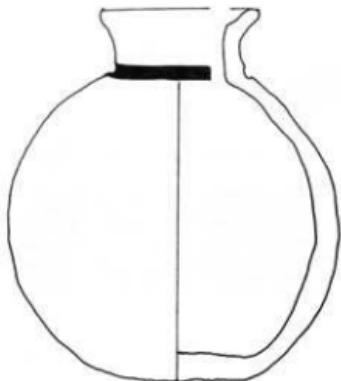
〔壺形土器〕-118

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞C2式粗製壺形土器である。
- このものは、平縁で口縁に小粘土粒を2と1対ずつ、4対付すもので胴部は横に強くふくらみ最大幅は、胴中央下にあり、底部には四脚をもつもので方形の底面を有するものである。
 - 施文は、口縁下に1条、頸部下に1条の沈線文がめぐる。胴部には細かい二段単節L・R罫文が密にやや不整に施文されるものである。
 - 色調は、器外面赤褐色、一部黒色、内面は黄褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含みザラザラするが、焼成は良い。
- ☆ 四脚のある壺形土器の出土数は少ないものである。



〔壺形土器〕-119 (底部図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2グリットⅡ層出土の大洞C2式精製壺形土器である。
- このものは、口縁に1つの突起を突き出すもので、突起の左右には、側方に張り出す小粘土粒を2つづつつけるもので頸部の径は小さいのに比して、頸部が長い特徴をもつものである。肩部は張らず、最大幅は、胴部中央にあって、ほとんど直線的に底部に達する器形である。
 - 施文は、口唇部に沈線文が1条、頸部下位に、細い沈線文が1条あるのみで他は無文のものである。
 - 色調は、器外面が栗色で横方向にナデられている。内面は灰黒色を呈し、胎土・焼成とも最良で堅緻である。(朱ぬり痕を若干認める)

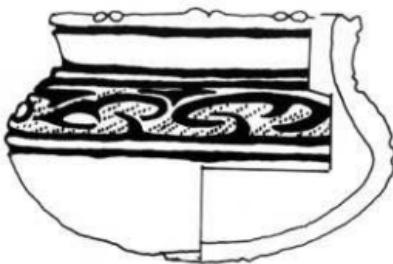


〔壺形土器〕-120 (図上復原)

- ☆ ここに掲げたものは、C地区AグリットA1区II層下位より出土した大洞C2式精製壺形土器である。
- ・ このものは図上復原したもので、口縁の形態は不明であるが図示したようになると考えられる。肩部は球形をなすもので底面は小さく、その整形は粗末である。
 - ・ 施文は、肩部上に浅い沈線文が1条めぐる他は無文である。整形はヘラ状工具で横方向になされている。
 - ・ 色調は、器外面は赤褐色、内面は灰黒色を呈し、胎土・焼成は最良である。
- ☆ この土器のように球形の胴部をもつ壺形土器は、本資料1このみであって破片の中にもないものである。



L・R→



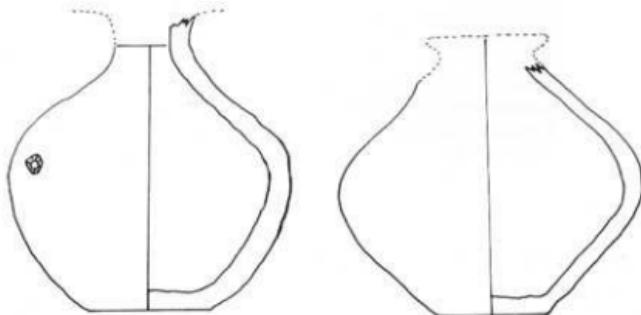
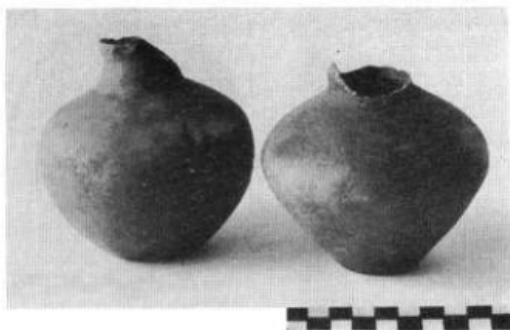
〔広口壺形土器〕 - 121 (口頸部復原)

☆ ここに掲げたものは、A地区J1グリットⅡ層下位出土の大洞C2式精製広口壺形土器である。

- ・ このものは、口頸部が広く、胴部がふくらむ器形である。口縁には、小突起が6対付くもので、口頸部がわずかに外反するものである。底面は沈線によって区画されるが小さい。
- ・ 施文は、口唇部に1条の細沈線文があり、口縁と頸部の境に沈線文1条、頸部下に2条の沈線文がめぐる。胴部中央上半には2条の沈線文によって文様帶を区画している。区画された胴部上半には、地文としてL・R縄文が施文され、その上に大洞C2式の曲線文が施文され、胴下半は無文で研磨されているものである。
- ・ 色調は、器外面は灰黒色、器内面は黒色である。胎土・焼成とも良く、器厚はうすいものである。

122 CA-A1-II下

123 AK2-II下



〔壺形土器〕—122・123 (口頸部欠損)

☆ ここに掲げたものは、C地区AグリットA1区II層下、A地区K2グリットII層下出土の大洞C2式半精製壺形土器である。

- 器形は、(122)は口頸部が外反するものである。また(123)は、口頸部の外反は強いものと考えられる。両者とも肩部が張らないもので、(122)は最大幅部がほぼ中央に、(123)は中央下位にある。底面は、前者は平底、後者はわずかに上ヶ底を呈する。
- (122・123)とも無文であって、横方向に研磨されているものである。
- 色調は、両者とも器外面灰黒色、内面は(122)は黒色、(123)は灰黒色である。
- 胎土・焼成とも良く、(123)は器厚がうすい。

☆ 器形をみると、(122)は大洞C2式の前半、(123)は後半に位置づけができるようである。

〔長頸壺形土器〕

AK 1-II

124

A P・L60

☆(A P・L53~116の底部)



(剥離した壺形土器の底部のようす)

〔長頸壺形土器〕-124 (口縁部欠損)

☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の大洞A式精製長頸壺形土器である。

- ・ このものは、口縁部が欠損しているが、図に示すように外に開く口縁と思われるが、口縁そのものの形態は不明である。頸部は末広がりに長く、肩部から胴部にかけて、ふくらむ器形で底面径は大きいものである。なお底面は、平底であるがやや中高である。
- ・ 施文は、口縁下より肩部まで、すなわち頸部は無文、肩部下より底部直上までは、平沈線文+綾杉文+平行沈線文、逆方向の綾杉文+平行沈線文というパターンの施文で、この原則は、規格化されているものである。
- ・ 色調は、器外面、赤褐色、一部灰黒色、内面黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好であるが器外面は、細かくヒビ割れのあるもので、ザラザラしているものである。
- ・ なお、写真右に掲示したものは、A P・L53-116の底部である。

AK 2 - II

125

CB-E 1 - II

126

AK 2 - II

127

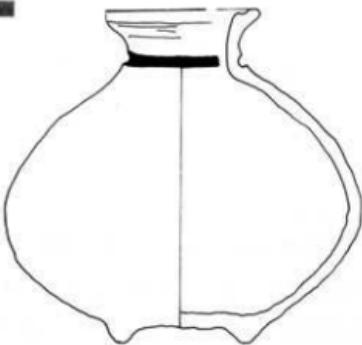


〔台付浅鉢形土器台部〕 - 125・126・127

☆ ここに掲げたものは、A 地区K 2 グリットII層、C 地区B グリットE 1 区II層出土の精製台付浅鉢形土器の台部で、いずれも大洞A式のものである。

- （125）は、台部径に比して器高がある。（126）は小形台部、（127）は一応ノーマルな器形であろう。
- 施文は、（125）は変形入り組み工字文、（126）平行沈線文のみ、（127）は、入り組み工字文である。
- 色調は、（125・126）は灰黒色、（127）は、黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良いが（125）は砂粒を多く含んでいる。

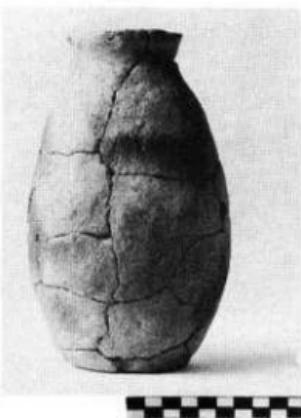
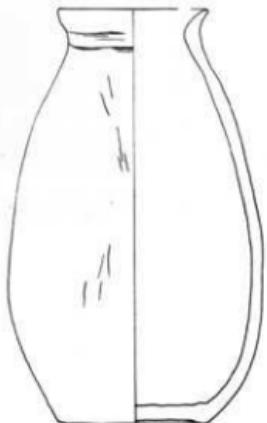
☆ 台部の施文は、大洞A式精製土器の浅鉢では、①変形入り組み工字文（一方的で入り組まないもの）②平行沈線文のみ ③入り組み工字文の3パターンがある。



〔壺形土器〕 - 128 (図上復原)

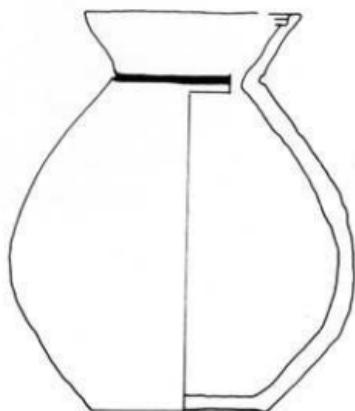
☆ ここに掲げたものは、C地区AグリットB1区のII層中位より出土した大洞A式精製壺形土器である。

- ・ このものは、口頸部の形態が不明であるが、肩部が張らず、胴部下半に最大幅部がある器形で、底部には、低い四脚が付けられており、底面は方形をなすものである。
- ・ 施文は、頸部下に沈線文が1条めぐり、他は無文である。横方向に軽くナデて整形したように見られる。
- ・ 色調は、器外面は明かるい赤褐色、内面黄褐色を呈する。胎土は精撰されたもので、細砂は含まれず最良である。焼成は良いが、器面はやわらかく剥離された箇所が多い。



〔壺形土器〕 - 129 (一部欠損)

- ☆ ここに掲げたものは、A 地区K 2 グリット II 層出土の大洞A式粗製壺形土器である。
- ・ このものの器形は、平縁で、口頸部がやや強く外反するものであるが口径が底径よりも小さいものである。胴部は長胴で、最大幅部は胴部下位にある。壺形土器としてはめずらしい器形で出土数は他に無い。
 - ・ 施文はなく無文土器（ナデ）は縦方向になされ、底面は上げ底である。
 - ・ 色調は、器外面は赤色の強い赤褐色をなし、内面も同様である。胎土は、やや悪く細砂を多く含む、焼成は良い。このものの内面一部に朱ぬり痕を認める。
- ☆ このものは、あるいは朱ぬり土器であったとも考えられる。

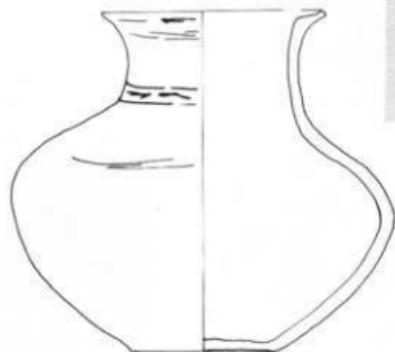


〔壺形土器〕 - 130

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 2 グリットⅡ層下出土の大洞A式粗製壺形土器である。
- ・ このものの器形は、口縁が平線で口頸部はやや強く外反するもので胴部は下ぶくれの洋梨状をなす器形で最大幅部は胴部下半にあり、底面は平底である。
 - ・ 施文は、口縁内側に細沈線が1条めぐり、頸部と肩部の境に1条の沈線文が施文される他は無文である。
 - ・ 色調は、器外面が灰褐色、一部黒色である。器内面は黄褐色を呈する。胎土・焼成は良く堅緻なものである。
- ☆ このものの器形は、誠に興味深いものがあるので類例を待ちたいと考える。

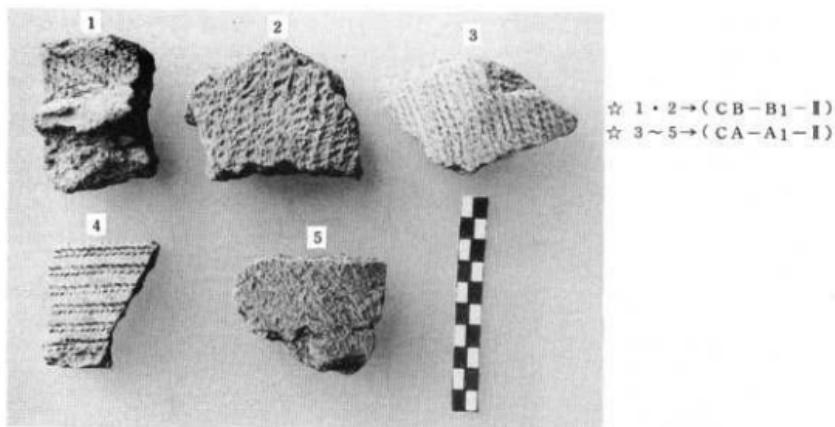
CA-B1-II下

131



〔壺形土器〕—131 (図上復原)

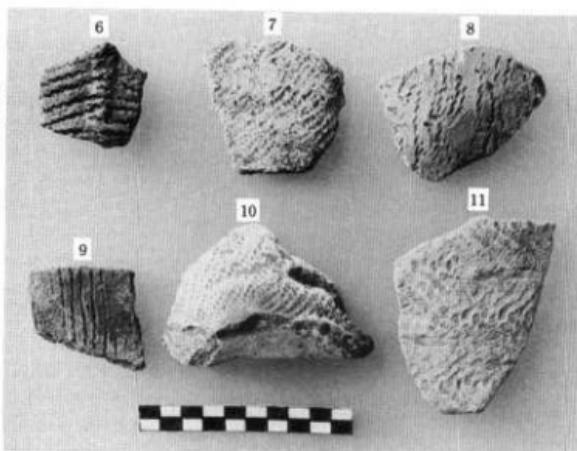
- ☆ ここに掲げたものは、C地区BグリットB1区II層下位より出土した大洞A式精製壺形土器である。
- ・ このものの器形は、口縁部が平縁で外反が強く、頸部が直立するもので、最大幅部は、胴部中央上にある。また底面は、やや上げ底気味のものである。
 - ・ 施文は、頸部下に、わずかに沈線状のものを認めるが施文とは言えず整形痕と考えた方が妥当と思われる。胴部は無文で横方向に研磨されたものである。
 - ・ 色調は、器外面は灰黒色、内面も灰黒色で、胎土・焼成ともに最良である。
- ☆ この壺形土器の器形、色調は、大洞C2式後葉より出現する一タイプと考えられるものであるが一応A式とした。



〔第2群土器〕

(中期の土器)

- ☆ 6～8・10→CA-A1-II
- ☆ 9→AN2-II
- ☆ 11→AJ1-II

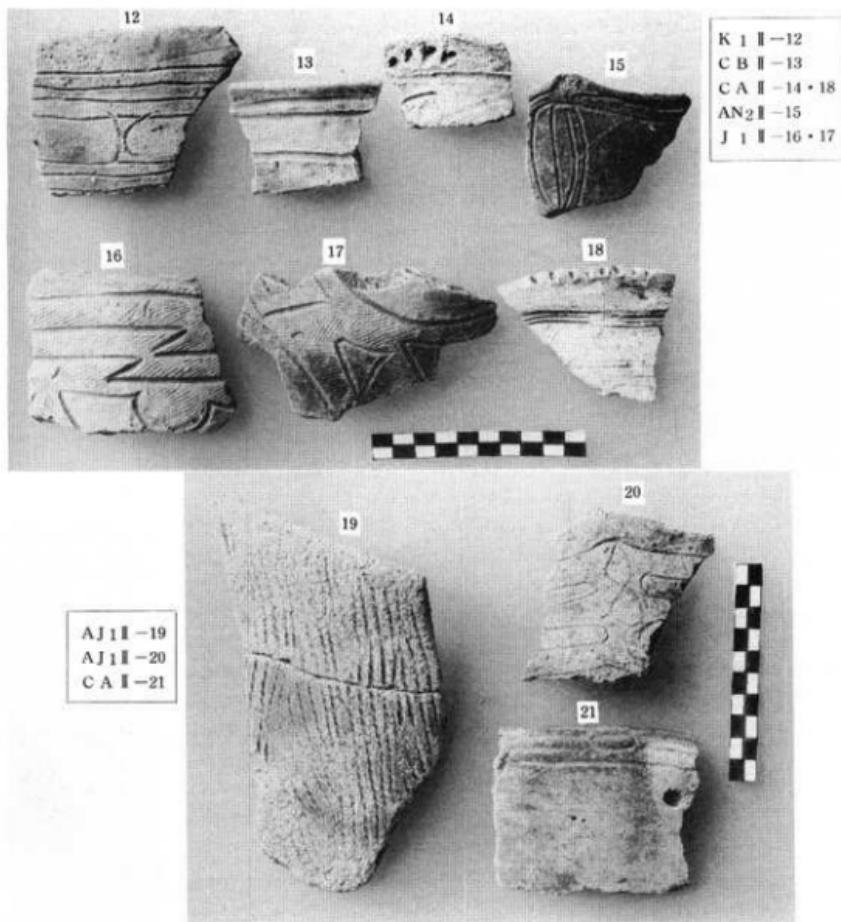


〔第1・2群土器〕—(1～5, 6～11)

- ☆ ここに掲げた土器は、上段が円筒下層式土器、下段は円筒上層式土器である。
- ・ このうち、(1)は円筒下層a式、(4)は同d式のものである。また(2・3・5)を含めて、胎土内に繊維を含むものである。
- ・ 下段のものは、胎土に繊維を含まず砂粒を混入するものである。(6)は、円筒上層a式、他は型式名は不明であるが、中期の土器である。

〔第3・4群土器〕（後期の土器）

P・L 2



〔第3・4群土器〕—(12~20, 21)

☆ ここに掲げた土器のうち、(12~20)としたものは、縄文時代後期のいわゆる「十腰内I式」土器である。この十腰内I式土器は、今回の発掘では、出土量の約40%を占める多量である。このうち、(12~15, 19・20)は、同型式の典型的なものであるが(16・17・18)は十腰内I式の土器群と一緒に考えることはむずかしい。施文のあり方、沈線文のあり方など少なくとも十腰内I式終末期以降とも考えられる研究を要する問題である。なお(21)は晩期大洞C2式深鉢形土器である。

22



23

☆AJ 1-II上
-22-23

24



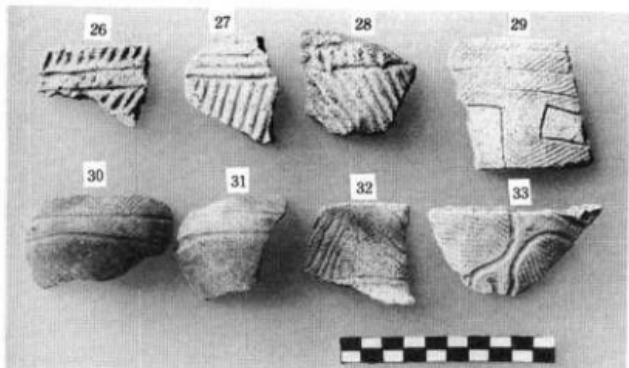
25

☆AJ 1-II上-24
25

〔第4群土器〕—(22~25)

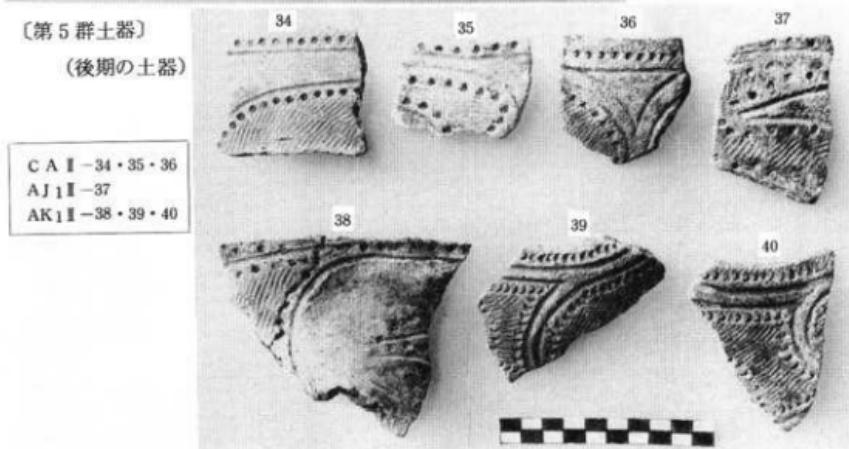
☆ ここに掲げた土器は、いずれもA地区J1グリットII層上出土の十腰内I式壺形土器である。

- これらの土器は、いずれも十腰内I式の最終末の土器と考えられるものであるが、いま少し検討を加えたいものである。



C A I {	26
27	
A J 1 I I {	28
29	
C B I I {	30
31	
J 1 I I {	32
33	

〔第5群土器〕
（後期の土器）

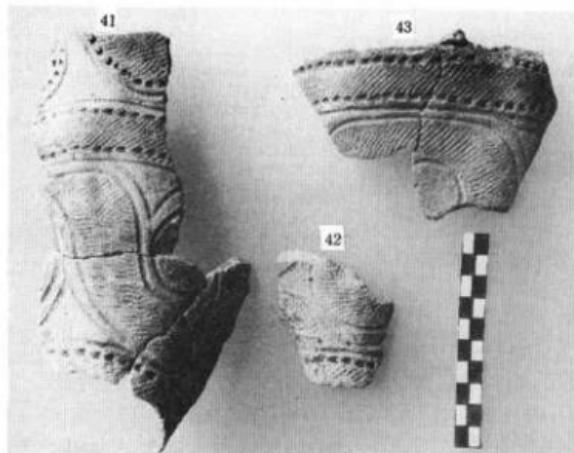


〔第4群土器〕—(26~33)

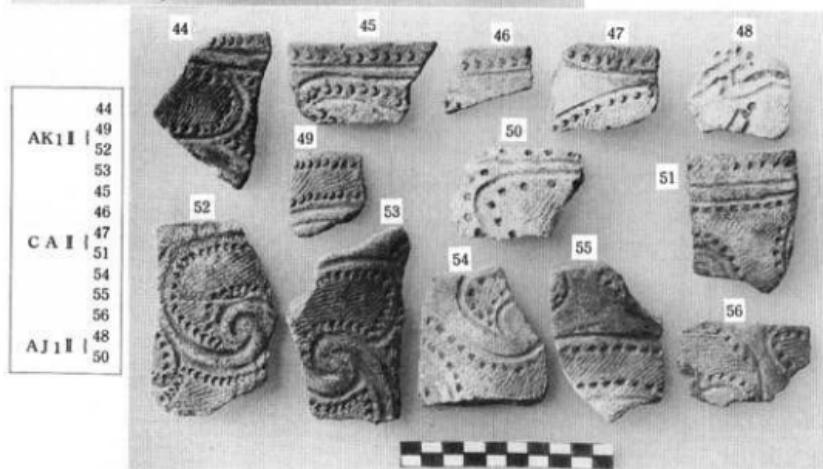
〔第5群土器〕—(34~40)

☆ ここに掲げた第4群とした土器・P・L.3—(22~25)、およびP・L.2—(16・17)に掲げた土器群は、少なくとも第3群土器とした「十腰内I式」と将来別個に考えていきたい土器である。本報告書においては、一応「十腰内I式」—第4群土器—「十腰内II式」と位置づけておきたいと思う。

☆ 第5群土器は「十腰内II式」の土器である。口縁が平縁で器厚の厚いもの、口縁が大きな波状を呈するもの、曲線文と円形刺突文のもの、曲線文と半月形の刺突文のあるもの等に分けられるが詳細は不明である。



☆ C A II -41~43



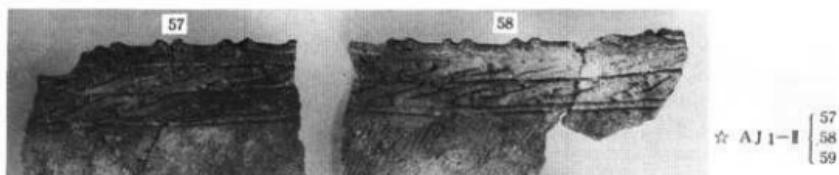
44
AK I I 49
52
53
45
46
C A II 47
51
54
55
56
A J I I 48
50

〔第5群土器〕—(41~56)

- ☆ ここに掲げたものは、すべて第5群とした「十腰内Ⅱ式」土器である。
- ・ これらの土器は、器形で二タイプ、すなわち口縁が平縁の鉢形、深鉢形土器、いま一つは、口縁が大波状を呈する深鉢形土器である。
- ・ 施文は、曲線文+円形刺突文（または半月形刺突文～三角形刺突文）+磨消帶+充填繩文等の組合せによるものである。
- ☆ 当地方（津軽半島西部）では出土例が少なく詳細は不明で今後の研究に期待したい。

〔第6群土器〕 (晩期の土器)

P・L 6



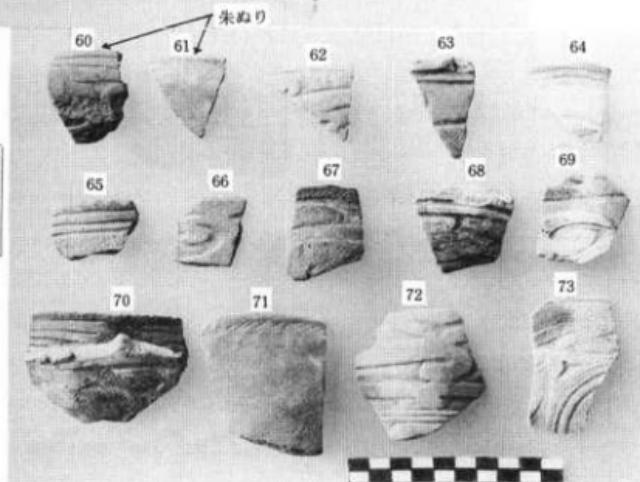
☆ AJ 1-II [57
58
59]

- 57・58・59は同一個体の鉢形土器である。

〔第7群土器〕

(晩期の土器)

AJ 1-II - 61・62・64・66
AJ 2-II - 65・68・70・73
C A II - 63・69・72
C B II - 60・67・71



〔第6群土器〕 - (57~59)

☆ ここに掲げた3片は同一個体のもので、大洞B・C式鉢形土器である。

- 今回の発掘では、この1個体のみ出土した。他に破片もない状態である。

〔第7群土器〕 - (60~73)

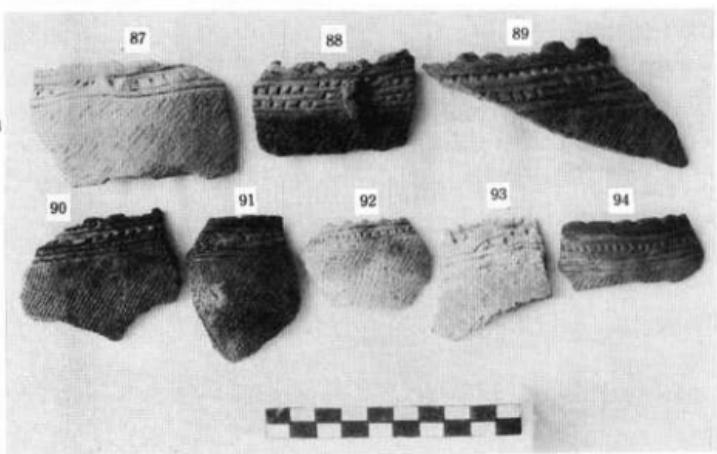
☆ ここに掲げた土器のうち、(65・70)を除き、他はすべて大洞C1式土器である。

また、(65・70)は、第8群大洞C2式土器である。



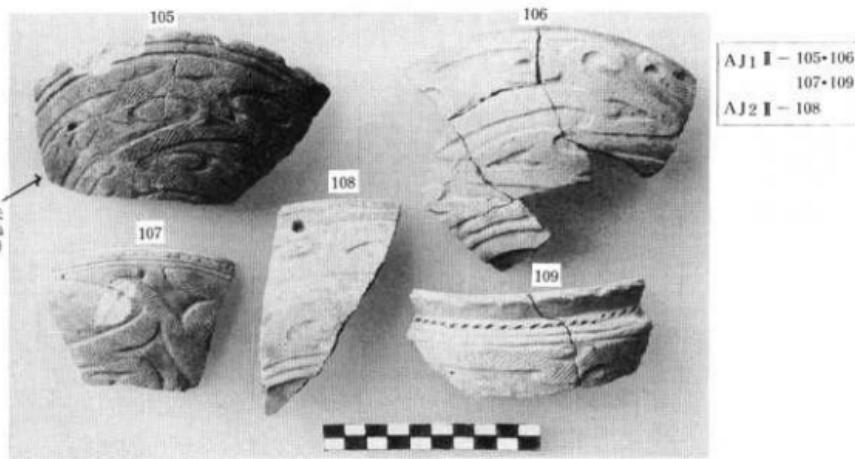
C A II -74・76・80
AJ 1 II -75・77・78・81
83・84・85
AJ 1 II -86
C B II -79・82

☆ AJ 2 II 下-87~94



〔第7群土器〕—(74~86, 87~94)

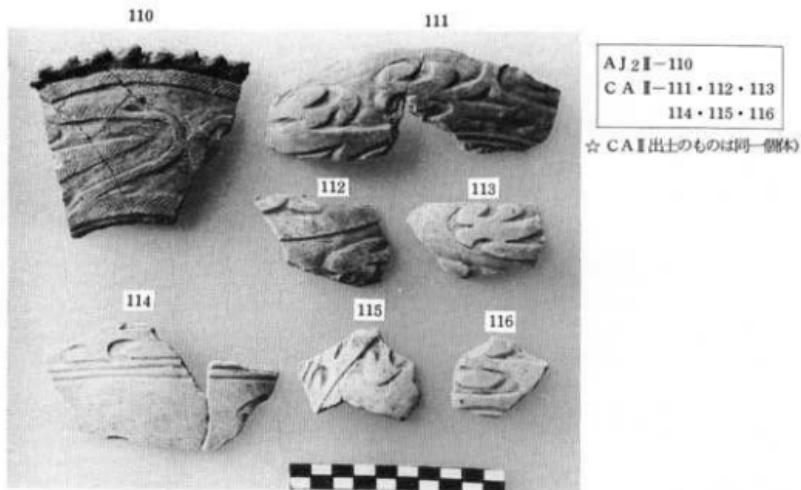
- ☆ ここに掲げたものは、すべて第7群とした大洞C1式土器である。このうち上段は、(74~86) 精製土器である。
- 上段のものは、すべて皿形土器で、(83) は胴下半部、他は口縁から胴部へかけてのものである。
- 下段は、すべて粗製の鉢形土器である。大洞C1式の刻目文が施文される。



〔第7群土器〕—(95~109)

☆ ここに掲げたものは、すべて、晩期大洞C1式の精製土器である。

- このうち、(100・109)は壺形土器、鉢形土器のもので、前者は頸部、後者は口頸部であろう。他のすべては、皿形土器である。
- いずれも研磨された磨消帶と縄文を充填した浮文帶を見せており、(100・109)は刺突文を施文したもの、×字文のもの等、いわゆる雲形文が施文されるものである。



AJ 2 II-110
CA II-111・112・113
114・115・116

☆ CA II出土のものは同一個体

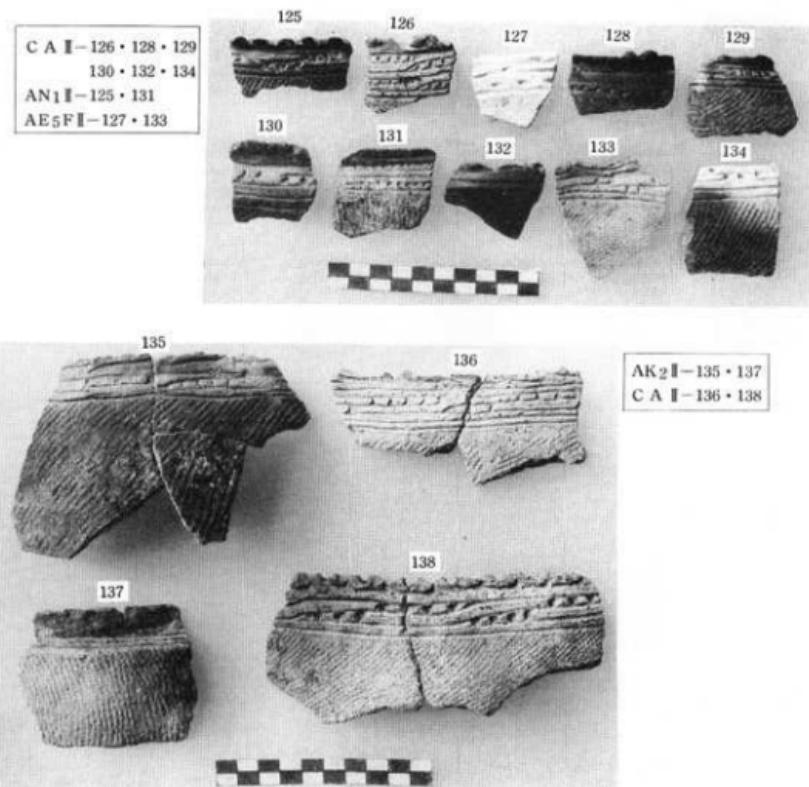


CA II-117・118
120・121
AN3 II-119
AK2 II-122
CB II-123
J x II-124

〔第7群土器〕—(110~116, 117~124)

☆ ここに掲げたもののうち、上段のものは、大洞C1式の精製土器で、(110)は、皿形、(111~116)は、同一個体のもので、これも皿形土器のようである。これらには、x字文、k字文が浮彫りに施文される。

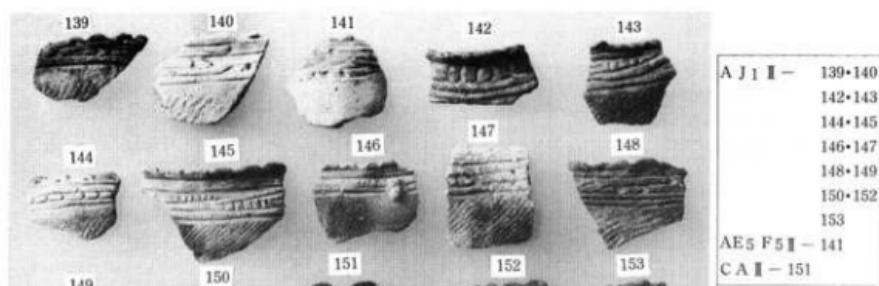
☆ 下段のものは、大洞C1式の鉢形土器で、メルクマールである刻目文が施文されているものである。



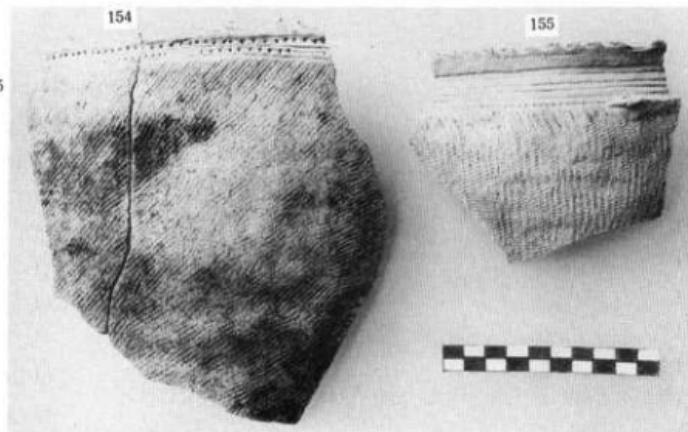
〔第7群土器〕—(125~134, 135~138)

☆ ここに掲げたものは、上・下段とも、大洞C1式粗製鉢形土器である。

- このうち、(135~138)は、大形の鉢形土器であろう。なお、(134)は深鉢形土器であろう。
- 口縁部を見ると、(134・137)は平線、他は、小波状の口縁である。なお(128)は、小突起が口縁に付くものである。
- 施文は、刺突文のないもの(132・137)、他はすべてに刺突文が付されているが、一型式前のB・C式の伝統を残すものが多い。



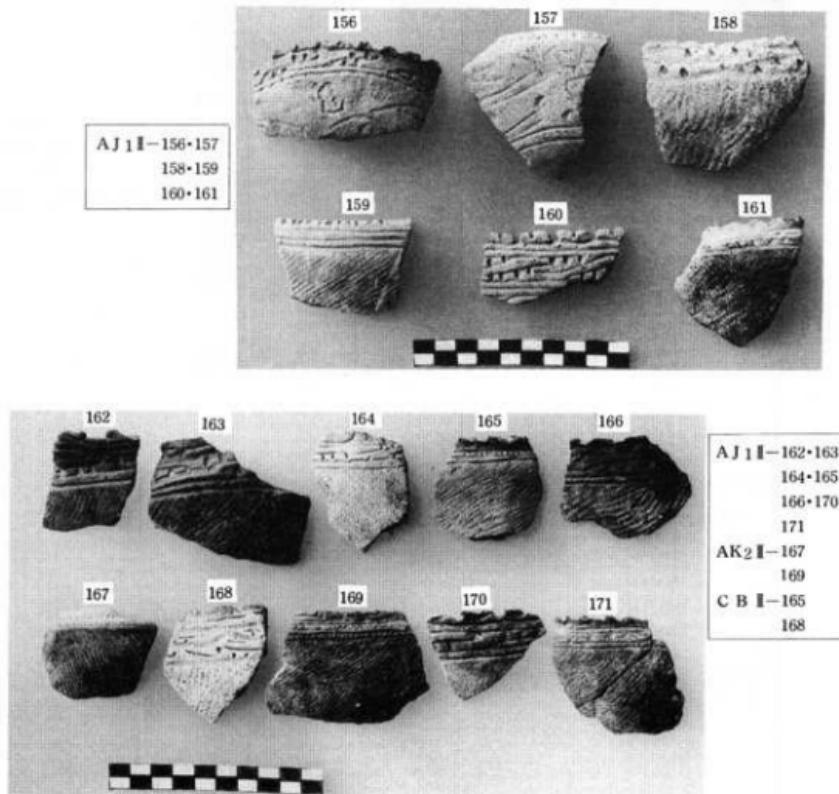
☆ A J 1 II - 154・155



〔第7群土器〕—(139~153, 154・155)

☆ ここに掲げたものは、上段、下段とも第7群とした大洞C1式粗製鉢形土器である。但し(142)は、壺形土器と思われる。

・ これらのもののうち、(154・155)は大形の鉢形土器である。器形の細かい特徴等は不明であるが、口縁上端には、刻目のある小波状を呈しており、この中には(150・151)のように、小突起を付すものもある。また(152・153)のように横方向の短沈線を頸部～肩部に施すものもあって興味深い。さらに刻目文をはさむ沈線が斜行する(143・145)に見られるように、大洞B・C式の名残りを残すものもある。

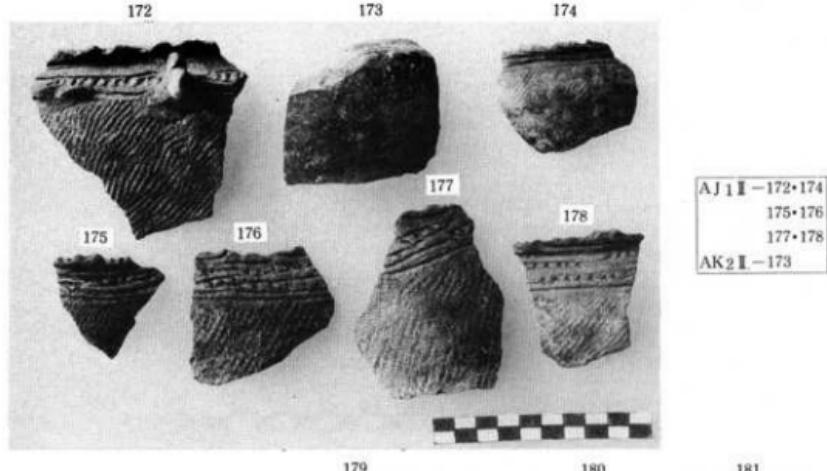


〔第7群土器〕—(156~161, 162~171)

- ☆ ここに掲げたものも、大洞C1式土器である。このうち、(157)は精製、他はすべて粗製土器で鉢形か深鉢形土器であろう。
- P・L 11と同様、口縁が小波状をなすものが多く大洞C1式粗製土器の一般的傾向として把握されるものである。なお(167)は平縁なるも肩部の張りが強い。
 - 施文は、これもP・L 11同様、刻目文が口縁～肩部にあるが(156)は、特異な文様である。

〔第7群土器〕（晩期の土器）

P・L13



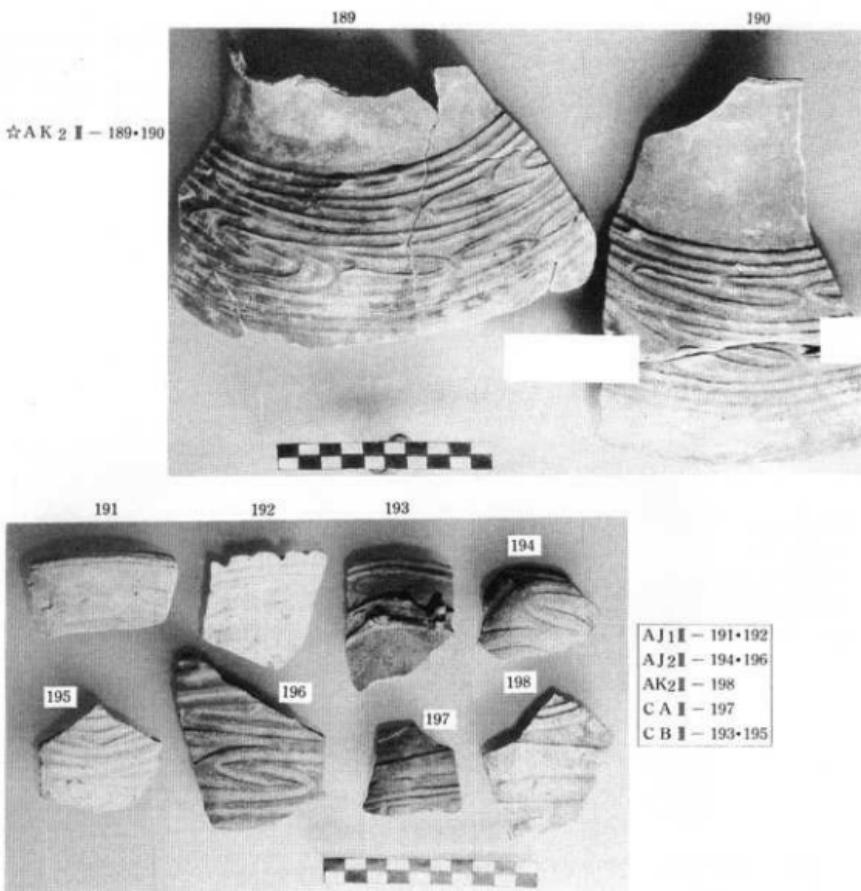
〔第7・8群土器〕
（晩期の土器）

AJ1 II - 179-180
181-182
184-185
186-187
188
CA II - 183



〔第7・8群土器〕-172～178, 179・180、186～188、181～185

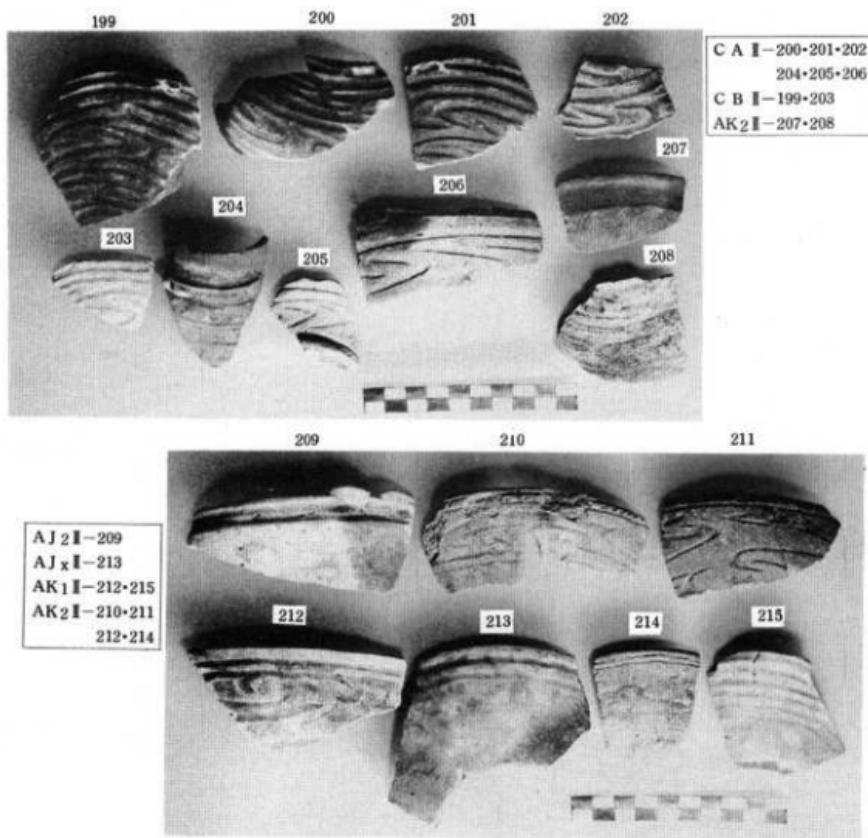
- ☆ ここに掲げたもののうち、(179・180・186～188)は、第8群土器(大洞C2式)で、他の(172～178、181～185)は、第7群土器(大洞C1式)である。
- ・ このうち、(179・186)は鉢形、(180)は皿形、(187)は壺形、(188)は壺形の脚部である。なお(180・187)は精製土器で(187)は朱ぬり痕を認める。また(172～178)は粗製鉢形土器で、(181～185)は精製土器で刻目文があり皿形土器であろう。



〔第8群土器〕-189・190, 191~198

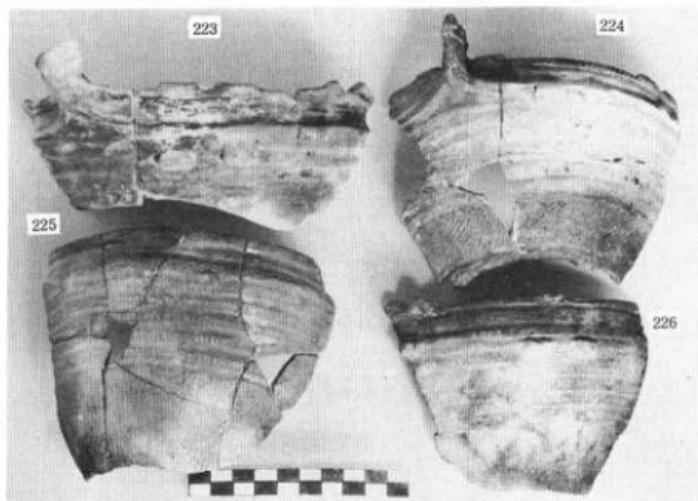
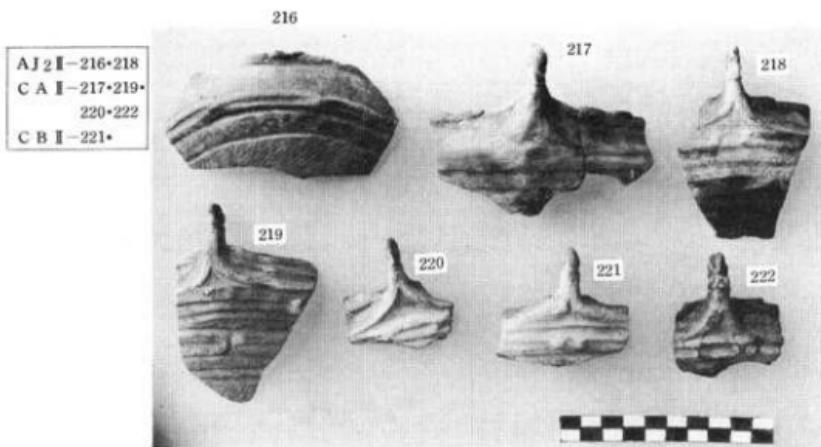
☆ ここに掲げたものは、すべて第8群とした大洞C2式精製土器である。

- このうち、上段の（189・190）は同一個体のもので、大型の壺形土器である。このものの施文は、大洞C2式の文様要素と、つぎの大洞A式の文様要素の両方を有する施文で朱なり土器である。多分大洞C2式期の後葉のものであろう。
- 下段のうち、（191・192）は皿形、（193・197）は壺形、（194・195・196・198）は鉢形土器と思われる。



〔第8・9群土器〕—199～208, 209～215

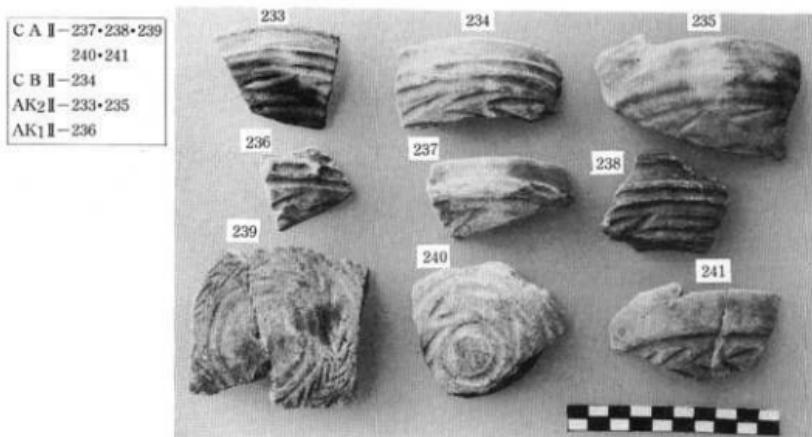
- ☆ ここに掲げたものは、第8群土器（199～204, 206～208）、第9群土器（205）である。
- また、下段の（209・211～214）は第8群土器、（210）は第7群土器、（215）は、第9群土器である。
- このうち、（204・208）は壺形土器、他はすべて皿形土器である。いずれも精製土器である。
- ☆ 第7群土器（大洞C1式）、第8群（大洞C2式）、第9群（大洞A式）。



〔第9群土器〕-216~222, 223~226

☆ ここに掲げたものは、いずれも第9群とした大洞A式鉢形土器である。

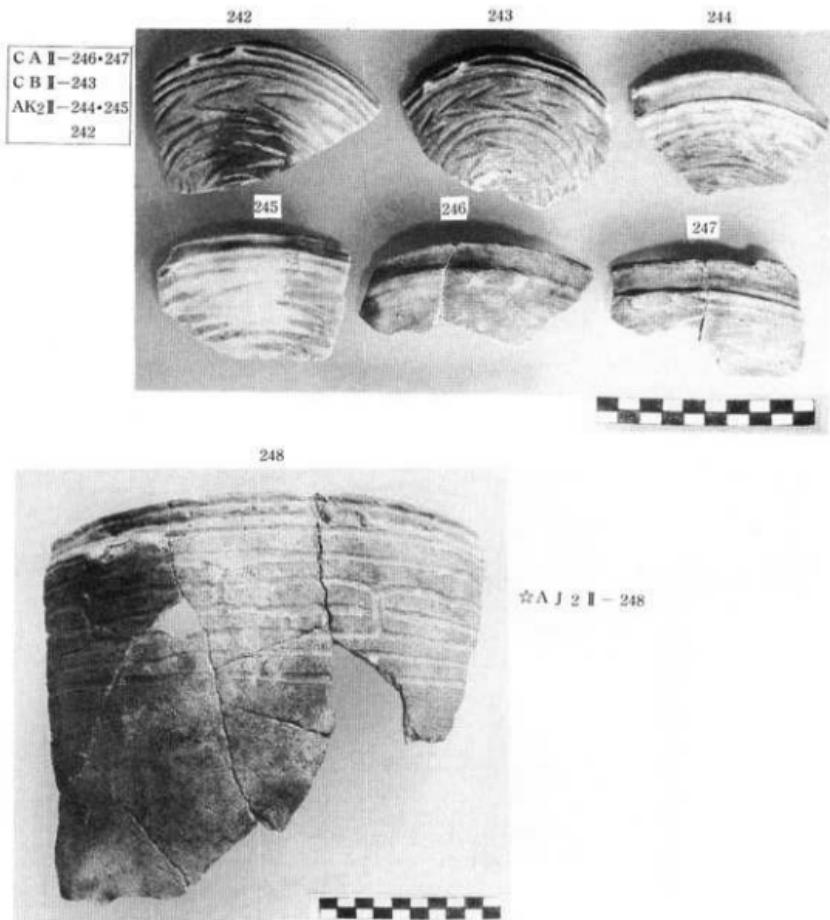
- ・ このうち、(216)は半精製、他は粗製土器である。また(216・225・226)を除く他のものは、把手の付くものである。



〔第9群土器〕-227～232, 233～241

☆ ここに掲げた上段、下段の土器は、いずれも第9群とした大洞A式精製鉢形土器である。

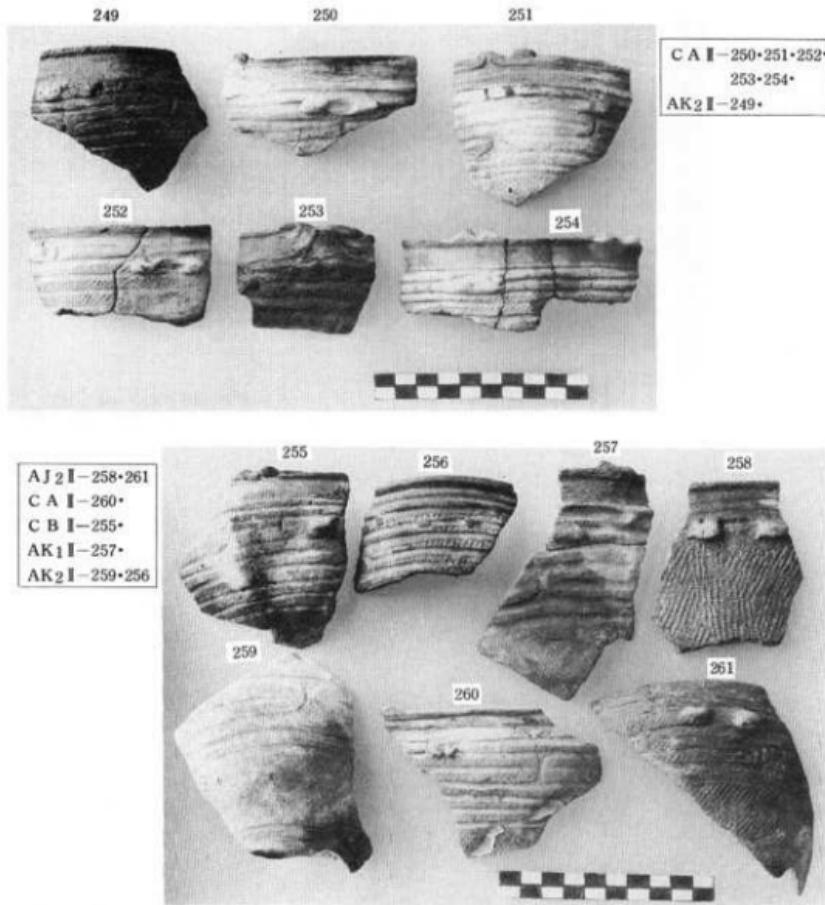
- このうち、(231・232・239・240)は土器底部である。



〔第9群土器〕—242～248

☆ ここに掲げたものも第9群とした大洞A式土器である。

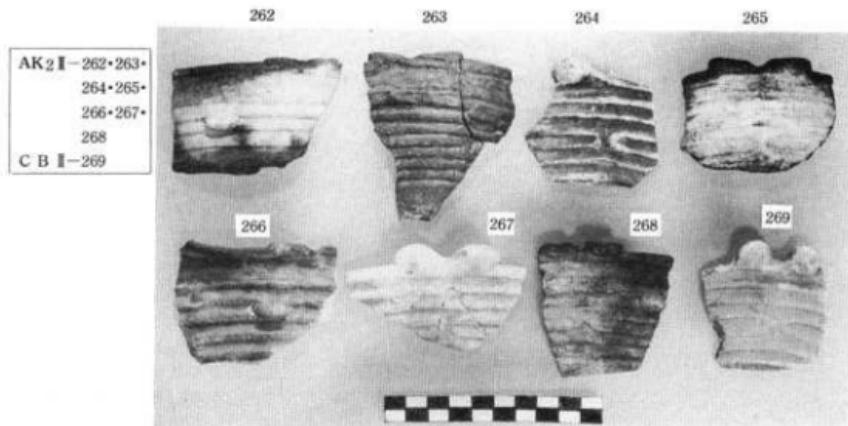
- このうち、(242～247)は精製浅鉢形土器、(248)は大形の深鉢形土器で粗製土器である。上段は綾杉文、下段は入り組み工字文が施文されている。



〔第9号土器〕—249～254, 255～261

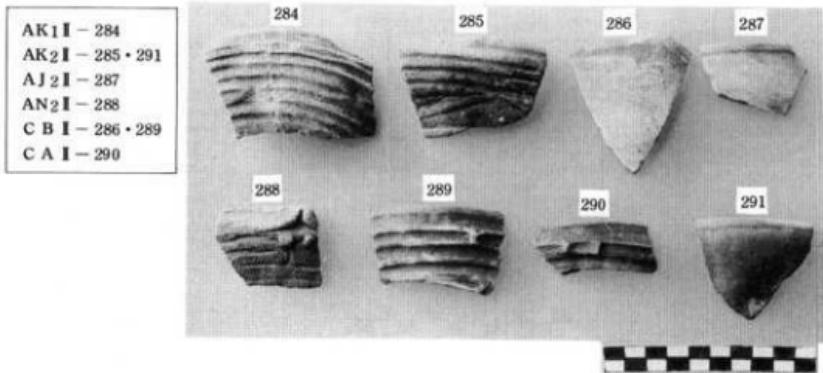
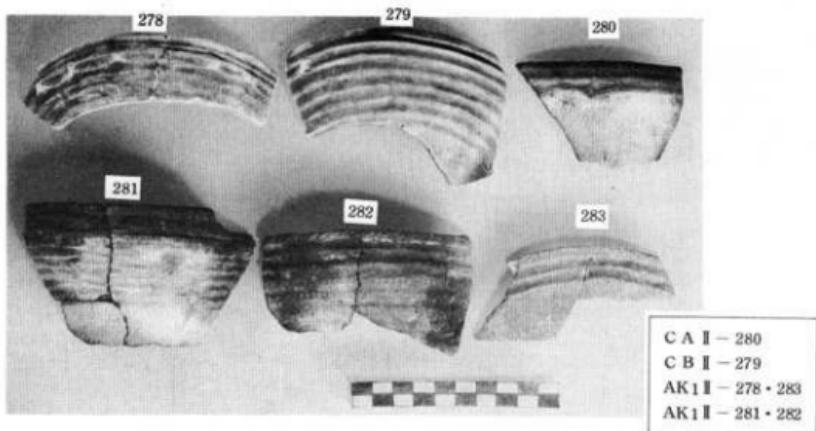
☆ ここに掲げたものは、いずれも大洞A式粗製鉢形土器である。

- このうち、(250・251・253・254, 255・257・260)には口縁に2こ1対の小突起を付すものである。その他は平縁のものである。
- この中には、頸部が無文体をなすもの、平行沈線文のあるもの、入り組み工字文に繩文を地文にしたもの、口縁上端に繩文が施文されたもの等がある。



〔第9群土器〕—262～269, 270～277

- ☆ ここに掲げたものも、第9群とした大洞A式精製・粗製鉢形土器である。
- ・ このうち、(262～269, 270・272～276)は、口縁に小突起をもつものである。
- ・ 施文は、入り組み工字文がすべてに施文されるものであるが、(270～271)等のように地文に繩文のないもの、および(266・274～276)等のように地文に繩文を付したものに分けられる。前者は精製・後者が粗製土器である。



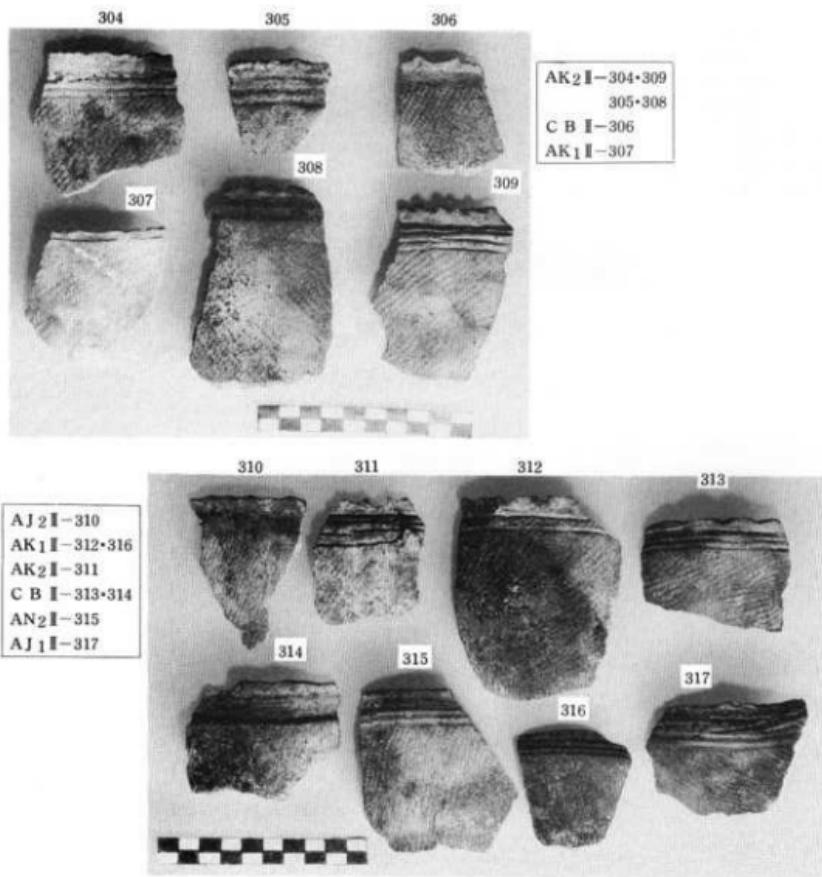
〔第9群土器〕—278～283, 284～291

- ☆ ここに掲げたものは、第9群とした大洞A式精製・粗製土器である。
- ・ このうち、(280～282)は粗製鉢形土器、他は精製土器である。(278・279, 283～285, 288～290)は鉢形土器、(286・287・291)は皿形土器である。



〔第9群土器〕-292~301, 302・303

- ☆ ここに掲げたものは、第8群（大洞C2式）、第9群（大洞A式）土器である。
- ・ このうち、第8群土器は、（293~295, 301・302）、他は第9群土器で両者とも粗製土器である。
- ・ （292・295~301）は皿形土器、（293~295）も皿形土器、（296・302・303）は鉢形土器である。



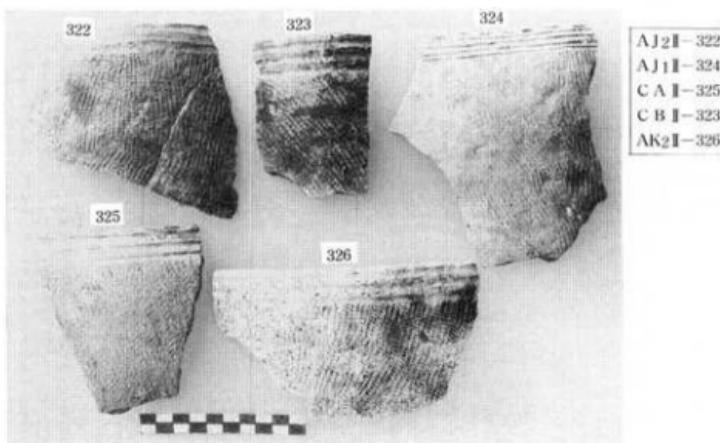
〔第7群土器〕-304~309, 310~317

☆ ここに掲げたものは、すべて第7群とした大洞C1式粗製鉢形土器である。

- このうち、(316)を除き、すべて口縁が小波状を呈するものである。また(317)は、大洞C1式のメルマールである刻目文がある。
- 縄文を見ると(308・317)は右下りで(R・L)、他は左下りに斜行する(L・R)である。この(R・L)のものは少ない。



〔第7・8群土器〕（晚期の土器）☆第8群a類—（322・323・325・326）



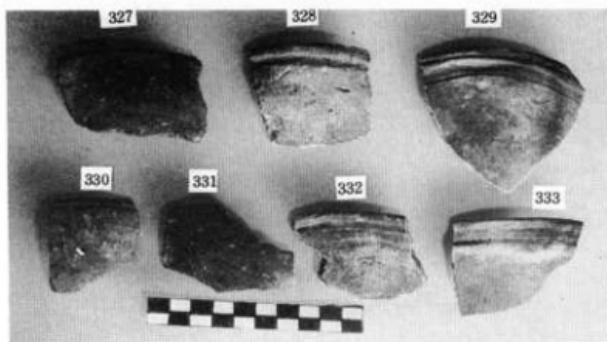
〔第7・8群土器〕—318～321, 322～326

☆ ここに掲げたもののうち、(318～321, 324)は第7群とした(大洞C1式)土器、

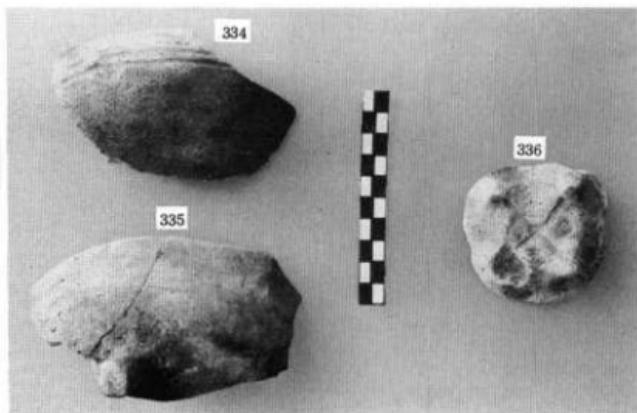
(322・323・325・326)は第8群とした大洞C2式土器である。

- ・ 器形は、上段鉢形土器、下段は大形の深鉢形土器である。

☆ (320)は、肩部が強く張るもので大洞C1式鉢形土器の一タイプである。また、大洞C2式とした深鉢は、その出土数が多い。なお(R・L)は(325・224)、他は(L・R)縄文である。



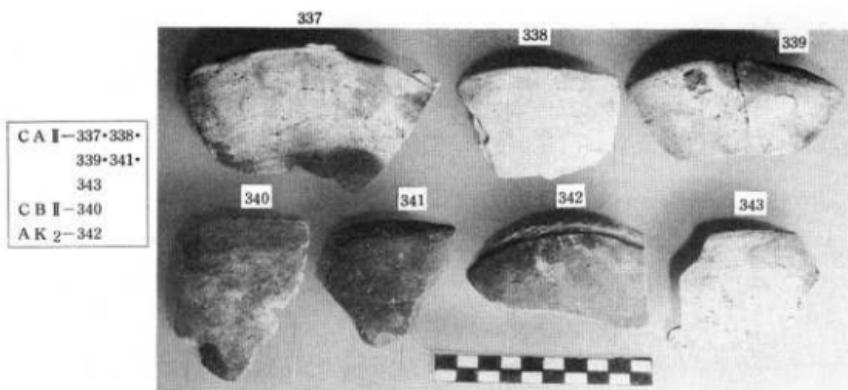
C A II - 327・329-
330・332
AJ 2 II - 328・333
AK 1 II - 331



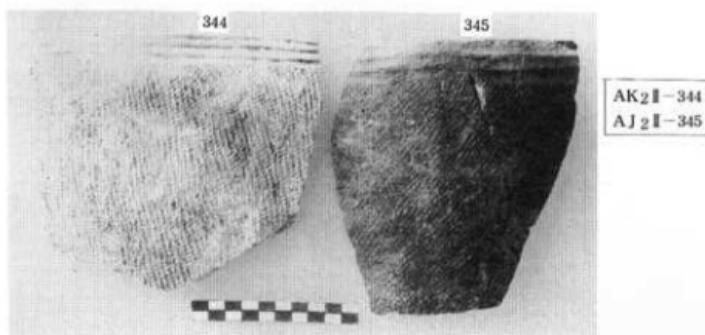
〔第8・9群土器〕-327～333, 334～336

☆ ここに掲げたものは、第8群とした大洞C2式土器、および第9群とした大洞A式土器である。

- このうち、上段のものは、すべて皿形土器、下段のうち（334）は皿形、（335）は四脚付浅鉢形土器、（336）は四脚付きの壺形土器と思われる。



〔第8群土器〕（晩期の土器）☆第8群a類



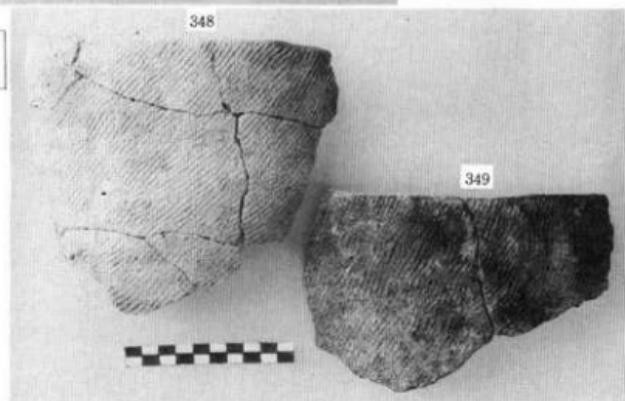
〔第8群土器〕-337～343, 344・345

☆ ここに掲げたものは、第8群とした大洞C2式の粗製土器である。

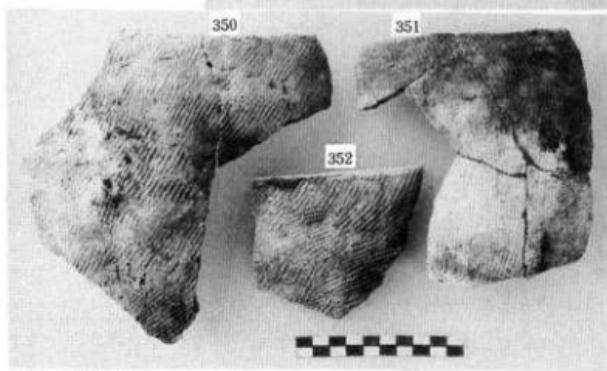
- ・ このうち、上段の（337～343）は、皿形土器、下段のものは、大形の深鉢形土器である。
- ・ 上段は、すべて無文、下段は、口縁下に3条の沈線文、胴部には、（344）はやや不整な（L・r）撚糸文が右下りに（345）は、（L・R）斜繩文が左下りに施文される。



☆AK2 II - 346・347



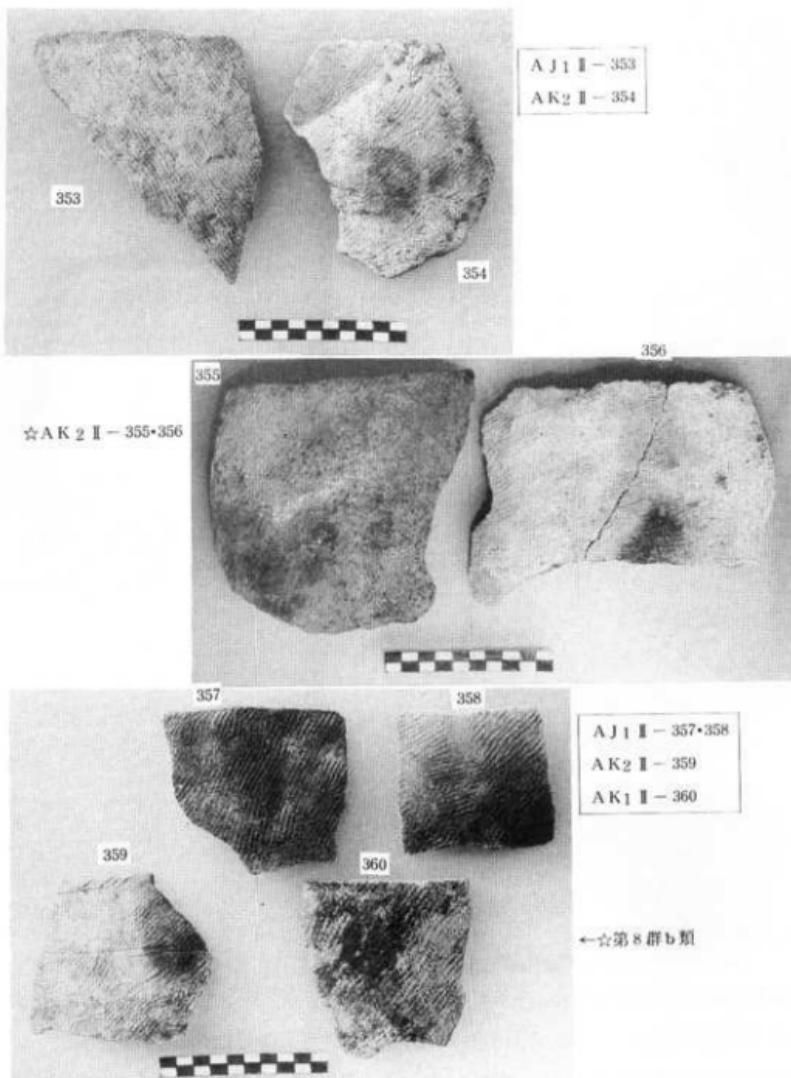
349

AJ1 II - 351・352
AJ2 II - 350

〔第8群土器〕 - 346～352

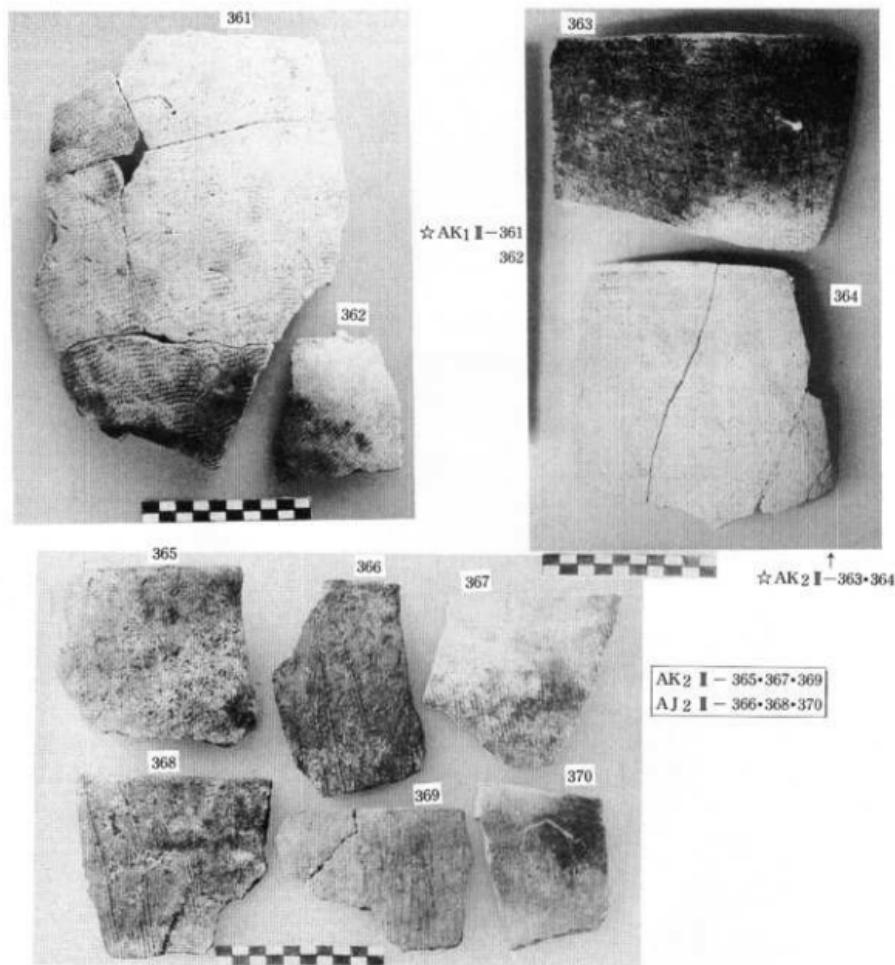
ここに掲げたものは、一応第8群とした大洞C2式粗製深鉢形土器である。

- これらのものは、口縁下より繩文が施文されるもので、口頸部がやゝ内傾気味のものである。一応第8群としたがつぎの大洞A式期にわたるものである。



〔第7・8群土器〕-353~360

☆ ここに掲げたものは、第7群とした大洞C1式粗製深鉢形、(353~356) および、第8群とした大洞C2式深鉢形土器(357~360)である。



〔第8群土器〕-361～364, 365～370

☆ ここに掲げたものは、第8群とした大洞C2式深鉢形土器である。

- ・ すべて大形のものであるが、(361・362)は口縁に、小突起を有するもので、縄文は(L・R)である。
- ・ (363～370)は、条痕文のあるもので、大洞C2式期に盛行するものであるが使用期間は長く弥生期にも使用される施文である。

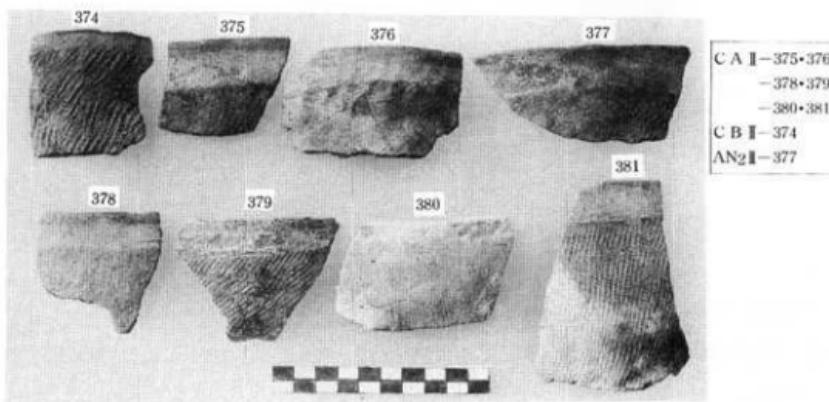
〔第8群土器〕（晩期の土器） ☆第8群c類（371・380）,

P・L30

第8群b類（373）



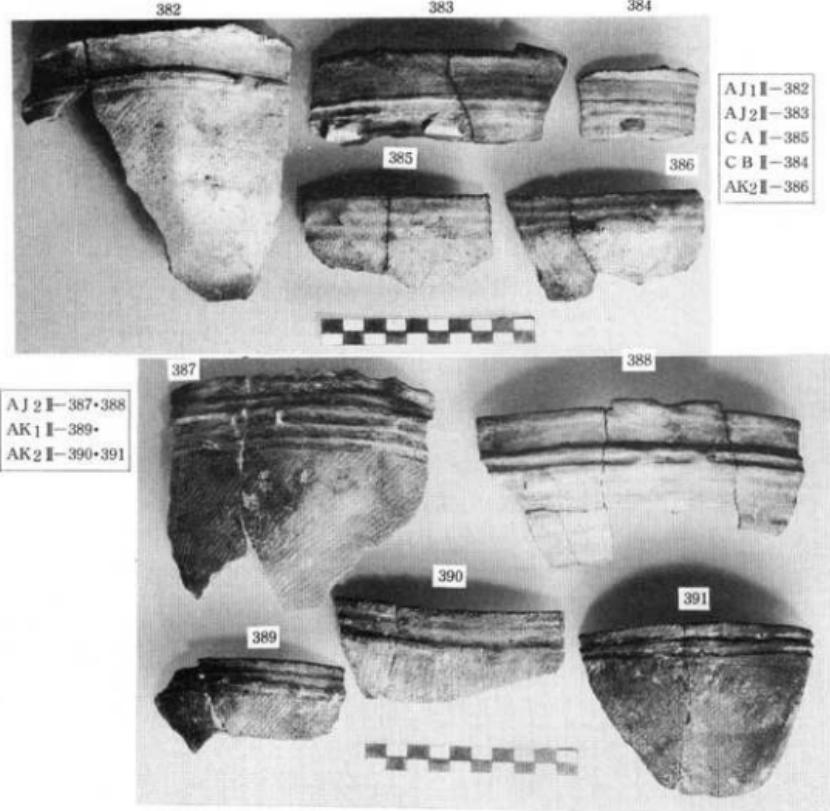
〔第8群土器〕（晩期の土器）（380）→第8群C類土器



〔第8群土器〕-371～373, 374～381

☆ ここに掲げたものも一応第8群とした大洞C2式粗製土器である。

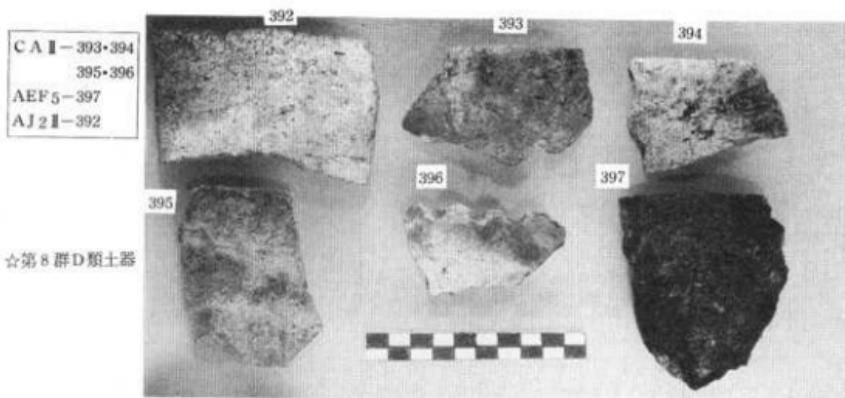
- このうち、（371～373）は、大形の深鉢形土器で、（372）は一型式先行するかも知れない。
- 下段の（380）は、P・L29下段の仲間であるが、他の（374～379・381）は、頸部が無文で肩部が張る器形のもので一タイプとして把握されるものである。



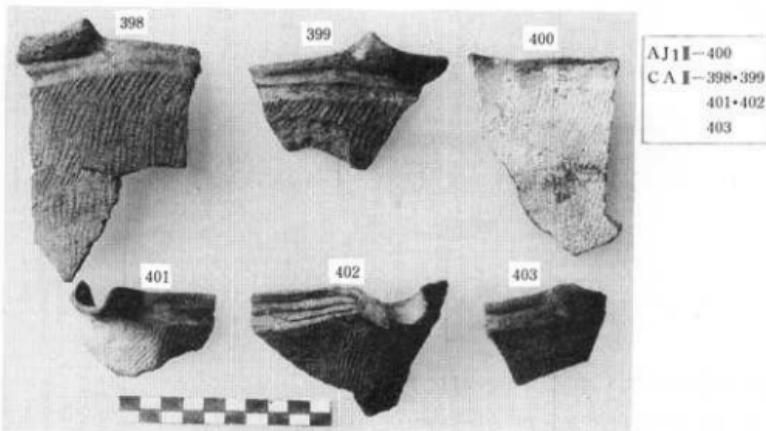
〔第8・9群土器〕—382～386, 387～391

☆ ここに掲げたものは、第8群とした大洞C2式、第9群とした大洞A式粗製鉢形土器である。

- このうち、(382～386)は、第8群、下段は第9群として一応分類したものである。
- 上段の(385・386)は頸部に平行沈線文のあるもので、(382～384)は、頸部が無文帶のものである。すなわち、(382～386)は大洞C2式、(382～384)は大洞C2式の後半のものであろう。
- 下段は、第9群としたが、(389～391)は口端に繩文の施文されるものである。また、(387・388)は、突起の形態の相違が見られ、(388)は入り組み工字文が施文されるものである。



〔第8群土器〕（晩期の土器）→片口鉢形土器



〔第8群土器〕 - 392 ~ 397, 398 ~ 403

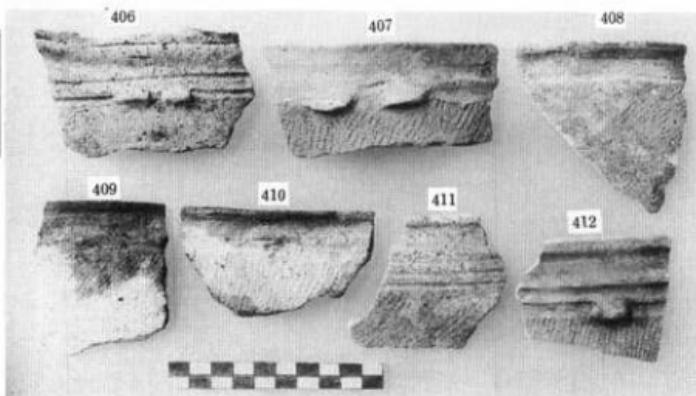
☆ ここに掲げたもののうち、上段は無文の深鉢形土器を一括したものである。一応第8群としたが、次型式にまたがる可能性もある。

- また、下段のものは、片口鉢形土器の破片である。一応大洞C2式土器の仲間とした。
- なお（396）は大洞C1式であろう。上段の無文土器は、大洞C2式粗製深鉢形土器の一タイプである。



☆ AK1 II-404・405

AK2 II-406・408
409・410
412
C A II-407
C B II-411



〔第8群土器〕—404・405, 406～412

☆ ここに掲げたものは、第8群とした大洞C2式粗製鉢形土器である。

- このうち、(404・405)は、胸部のふくらみが大きいものである。この胸部を有する鉢形土器は、出土数は少ないが土器組成の一タイプとして出土がある。
- 下段は、大洞C2式後葉のものようである。口縁下の頸部が無文で平行沈線文が肩部にまで下っている点等特色がある。
- とくに(407)は、小突起の形態や施文のあり方から次型式に近い要素をもっているように思われる。



〔第8群土器〕 - 413 ~ 416

☆ ここに掲げた（413～416）は、第8群（大洞C2式）とした大形の粗製深鉢形土器である。

- ・ いずれも頸部～肩部にかけて平行沈線文が3条めぐるもので、大洞C2式の基本的な施文である。
- ・ 施文されている範文は、いずれも左傾するもので、（L・R）であるが（416）は不整である。